

島根県スポーツ少年団に関する実態調査

1. 調査の概要

(1) 目的

本県スポーツ少年団の活動の実態を把握し、今後の望ましい少年団活動に資するため

(2) 対象

平成17年度に島根県スポーツ少年団に登録した単位団

(3) 実施期間

平成18年8月8日～9月30日

(4) 回収方法

返信用封筒による料金受取人払方式

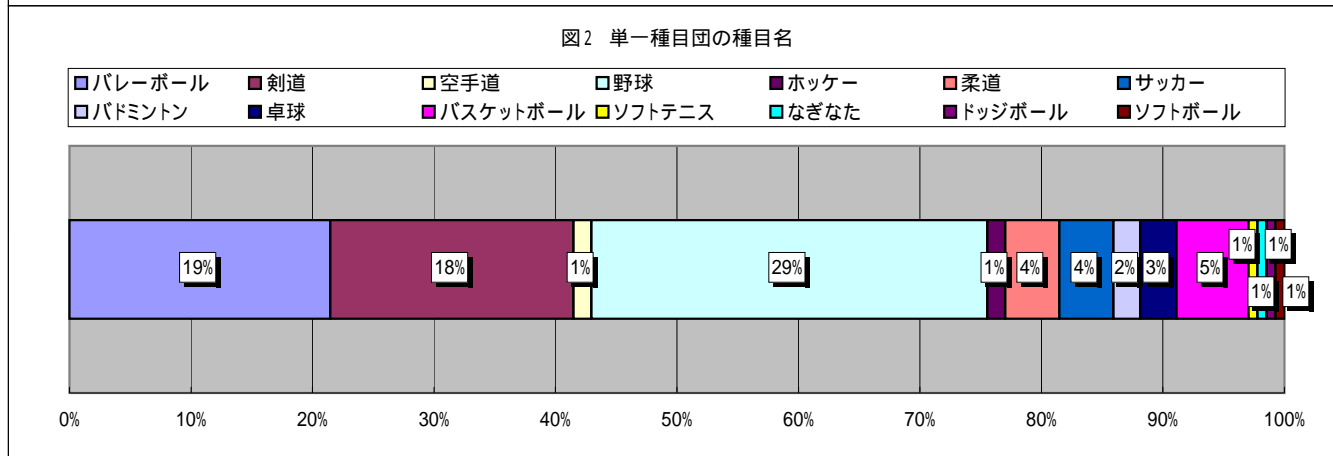
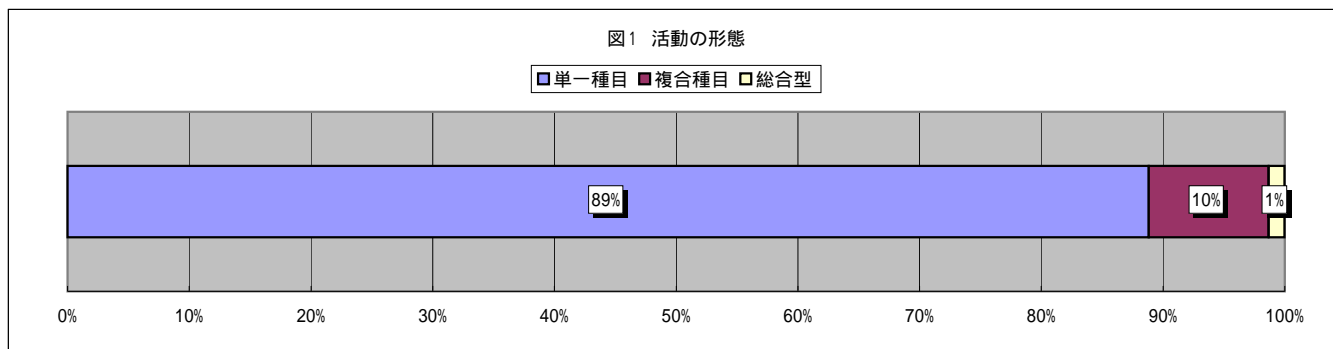
(5) 調査票回収状況

配布数 338 回収数 153 回収率 45.3%

2. 調査結果の概要

(1) 活動の形態

活動形態は、単一種目が89%、複合種目が10%であった。また、総合型スポーツクラブとしての活動は1%だった。活動種目は、軟式野球が全体の3割を占め、次にバレーボール、剣道、ミニバスケットボール順で、14種目に亘っている。



(2) 大会、遠征等への参加

大会参加回数は、「5～9回」が41%と最も多く、「10～14回」が29%「4回以下」が13%であった。また、「20回以上」と答えた団が11%も占めていることが分かった。主催別では、競技団体主催が58%、スポ少・その他が各21%であった。

主催別の参加回数は、スポ少主催の大会には1回が35%、2回が23%、4回以上が15%と回答。参加しなかったも15%あった。競技団体主催には4回以内が51%、5～9回が30%10回以上が19%だった。その他企業等の主催にも半数以上が参加し、4回以内が35%、5回以上は18%あった。

また、県外の大会に参加したことがある団は37%あった。県内の大会で宿泊を伴った場合が35%、県外では69%あった。その場合、県内では1泊が76%を占めているのに対して、県外では1泊が45%3泊以上は42%あった。

図3 大会、遠征への参加回数

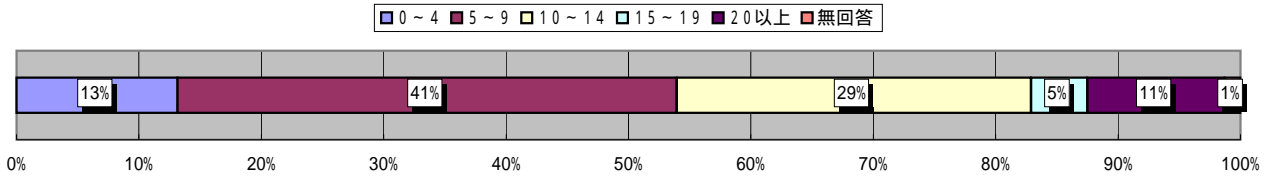


図4 主催別 (単位:延べ参加回数)

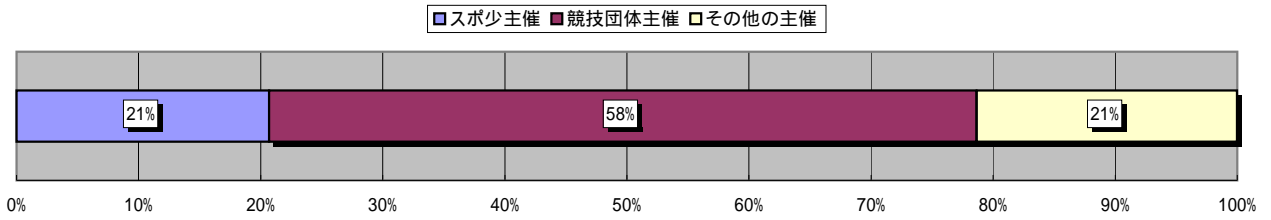


図5 スポーツ少年団主催

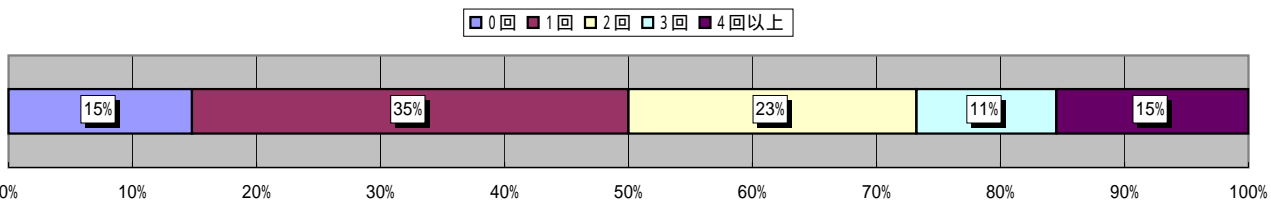


図6 競技団体主催

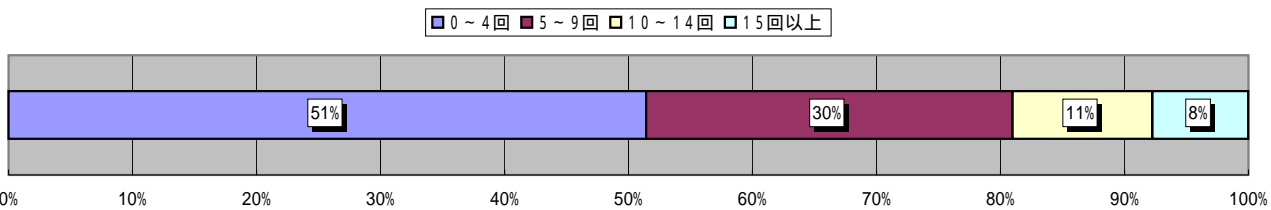


図7 その他主催

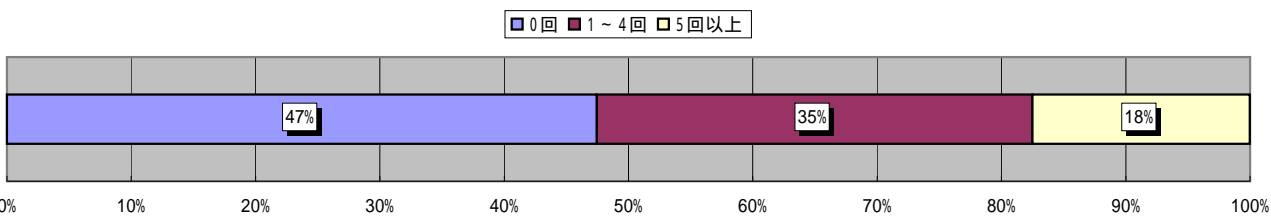


図8 場所

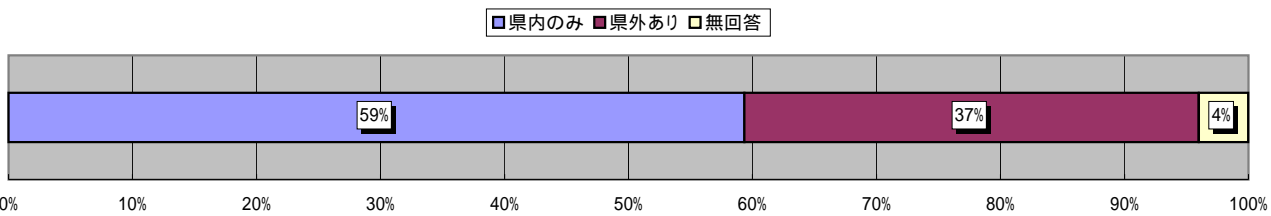
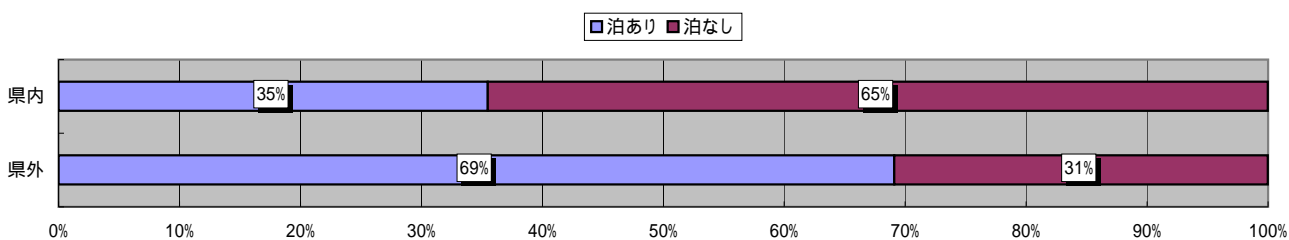
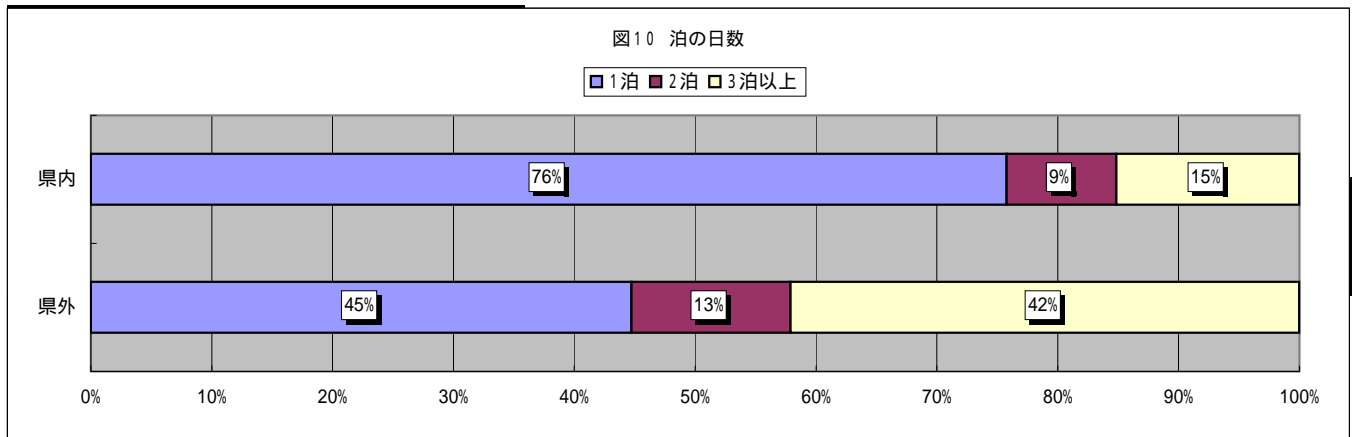


図9 泊の有無





(3)活動の実態

活動は学校施設を利用するが73%であった。

平日の練習回数は2日が34%、3日が23%、1日が21%であった。平日は練習しない団が13%あった一方、毎日練習する団も3%あった。

土日については、両日とも活動する団が45%、どちらか一日活動する団が37%あり、両者を併せると82%あった。活動をしない団は16%であった。

1週間の合計は2日が34%と最も多く、次いで3日、4日、5日の順であった。1週間休まず活動すると回答した団が1%あった。

活動時間は、平日は2時間以内が56%と半数以上を占める。一方休日は土日とも60%が2時間以上活動をしている。3時間以上活動すると回答した団は土曜日では28%、日曜日では34%もあった。

一週間の延べ活動時間は5～10時間が45%と最も多く、70%は10時間以内と回答している。11～15時間活動していると答えた団は18%あり、16時間以上と回答した団が8%もあった。

いつまで活動するかについては、小学生までが74%、中学生までは20%、リーダーとして高校まで活動するのは3%しかなかった。

団活動への参加は、1年生からが58%、2年生からが23%、3年生からが17%、4年生からが1%だった。小学校卒業後も継続して活動するよう呼びかけしているのが23%、リーダーとして活動するよう働きかけている団が5%で、70%は卒団としている。

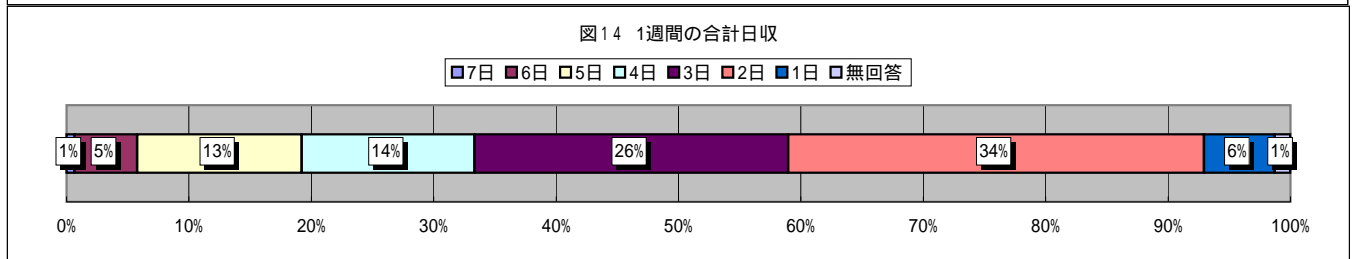
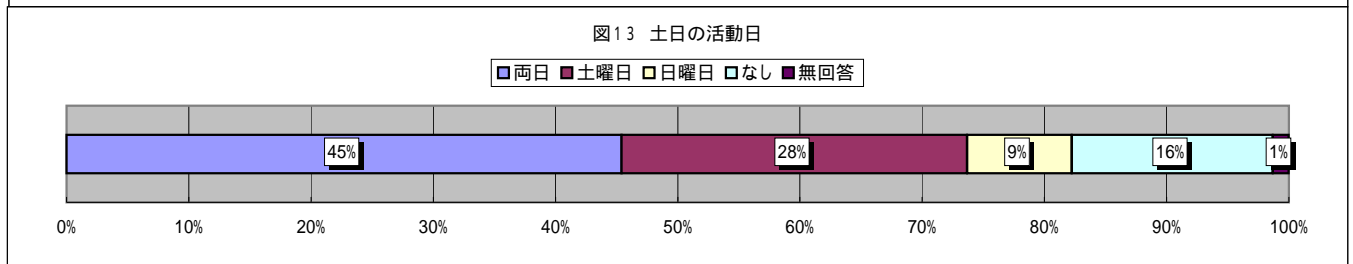
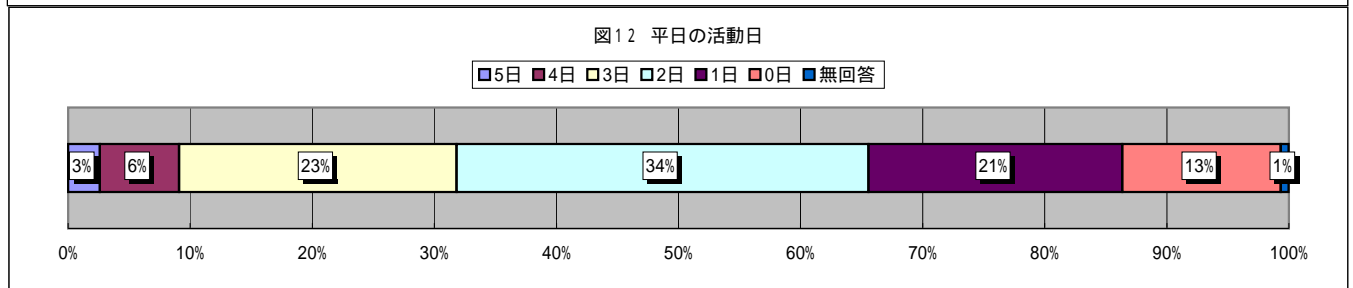
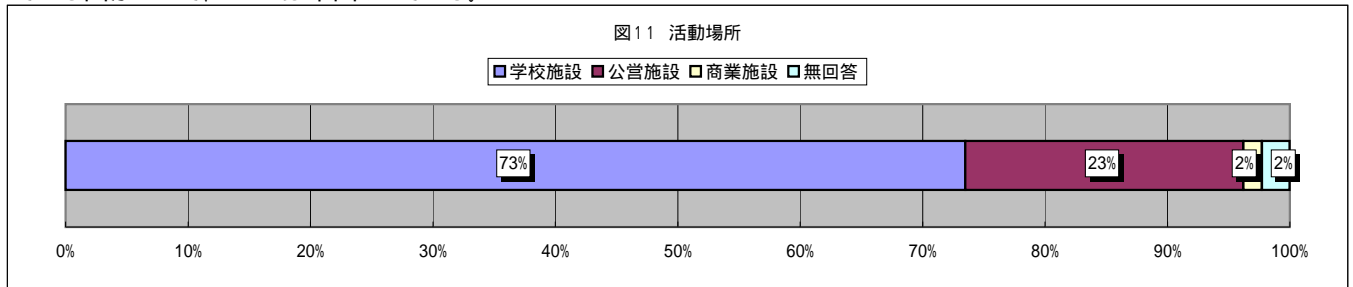


図15 平日の活動時間

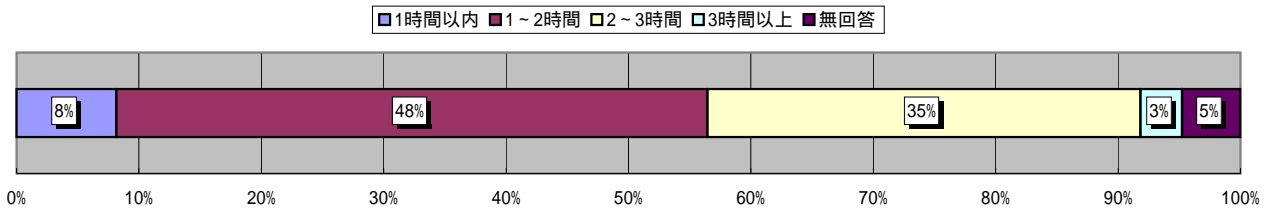


図16 土曜の活動時間

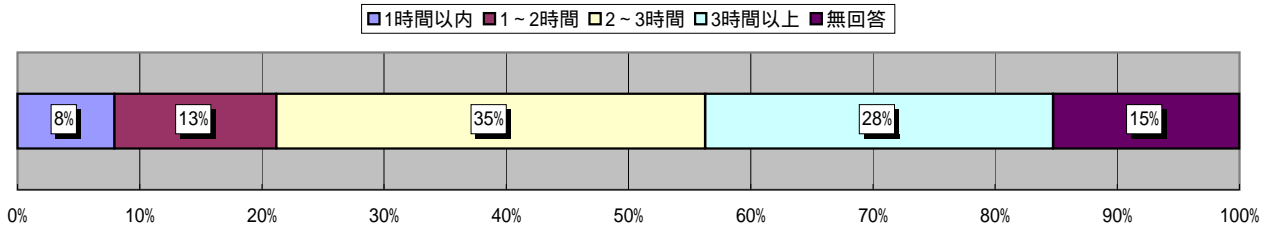


図17 日曜・祭日の活動時間

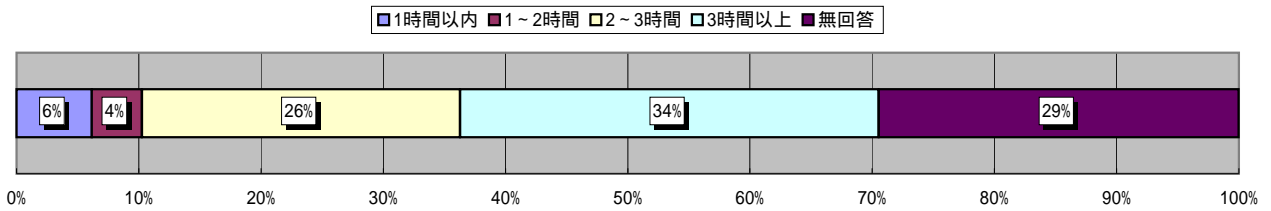


図18 1週間の合計時間

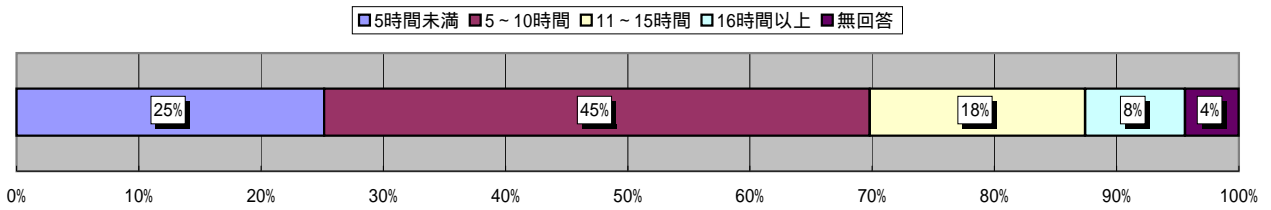


図19 いつまで活動をするか

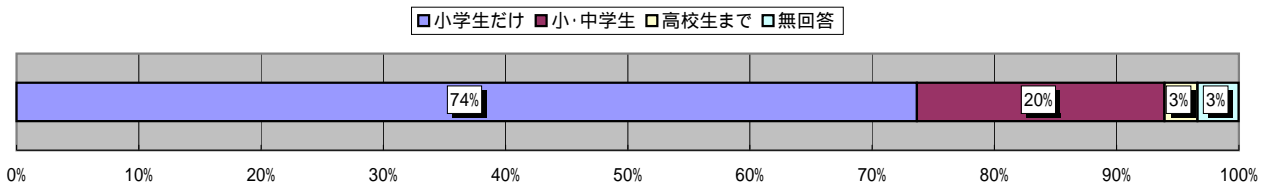


図20 何年生から活動

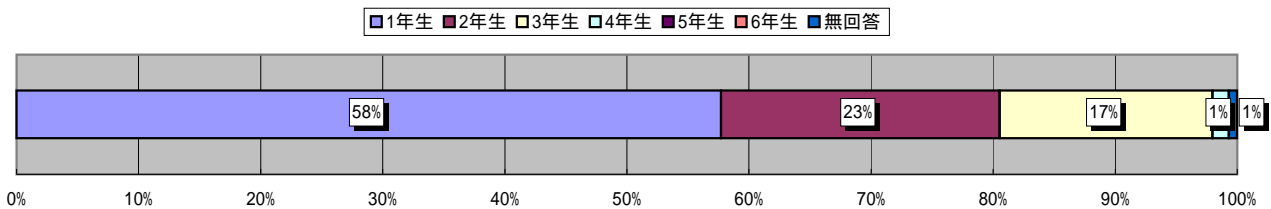
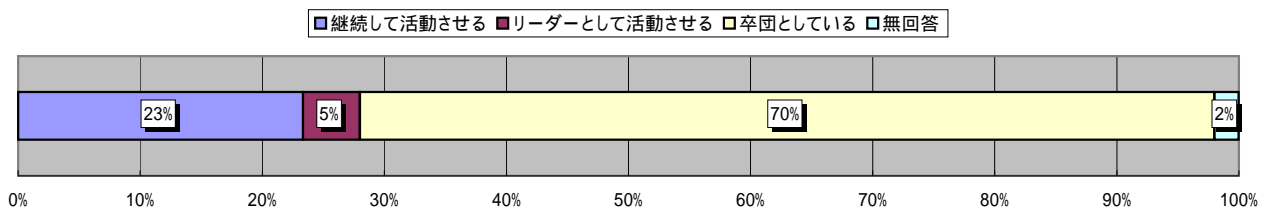


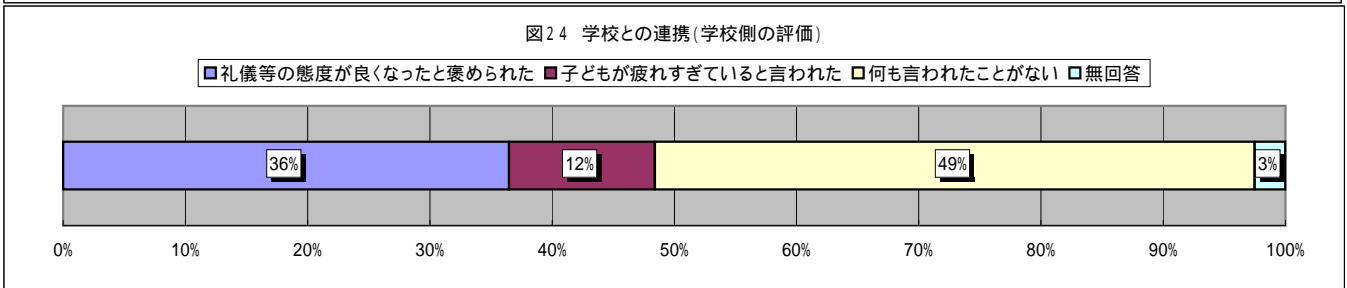
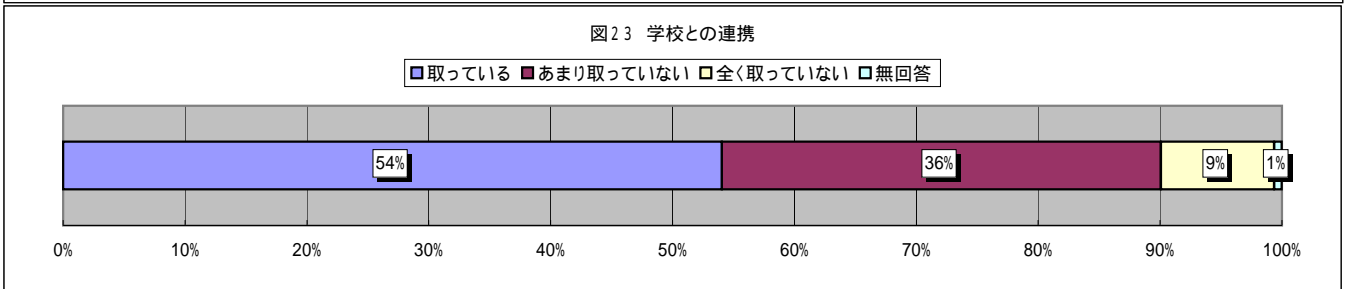
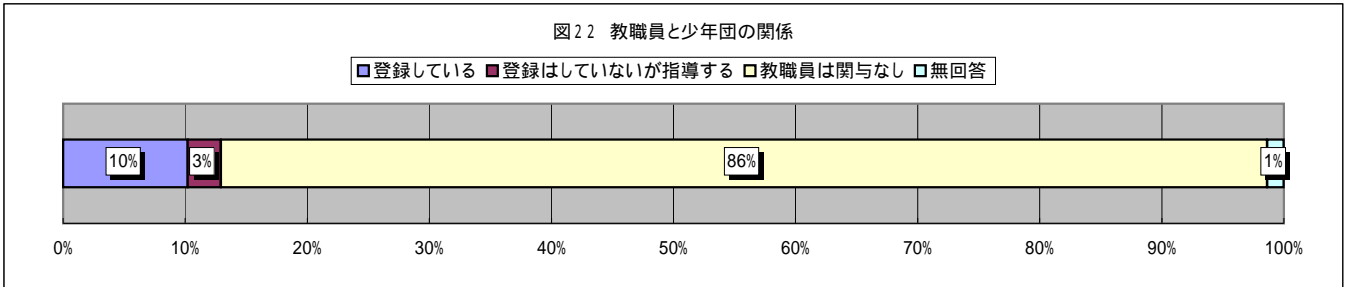
図21 小学校卒業後の団員への働きかけ



(4) 学校との関わり

教職員が指導者として登録している団は10%、指導に携わっている団が3%に対し、86%はまったく関与していないと回答している。

活動内容等について、学校と連絡を取り合っている団は54%で、あまり取っていない、まったく取っていないは45%であった。逆に、学校から子どもの態度・挨拶等が良くなったと褒められたが36%、子どもが疲れすぎているが12%あったのに対して、半数は何も言われたことがないと回答している。



(5) 保護者の関わり

指導者に全て任せきりは5%で、89%は練習・大会等への送迎や当番制による世話をこなっていた。

活動費では、1万円程度が35%、3万円程度が34%で5万円程度までが全体の80%弱を占めているが、8万円以上も13%もあった。

地域でボランティア活動や、レクリエーション活動を通して交流を図っている団が67%あったのに対して、まったくないは21%だった。

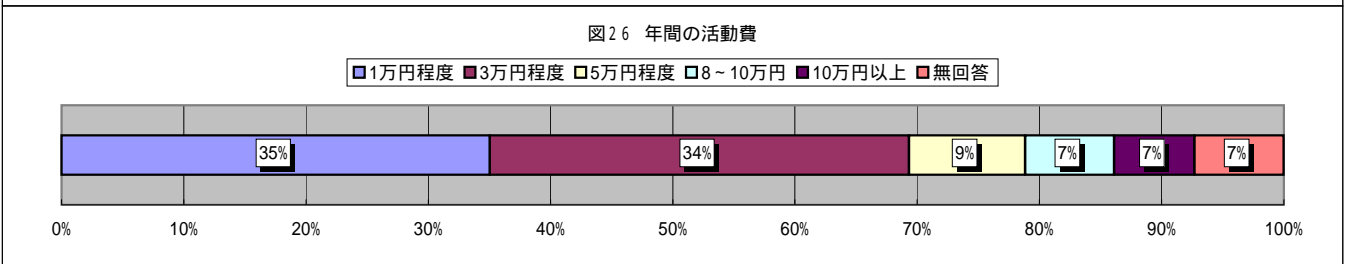
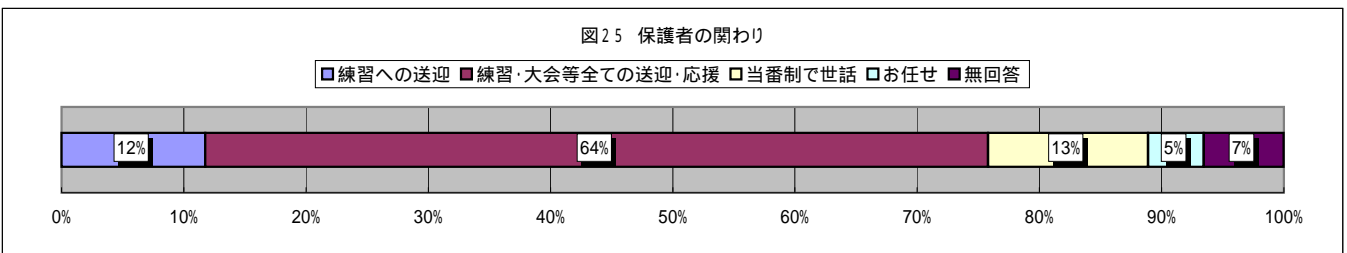
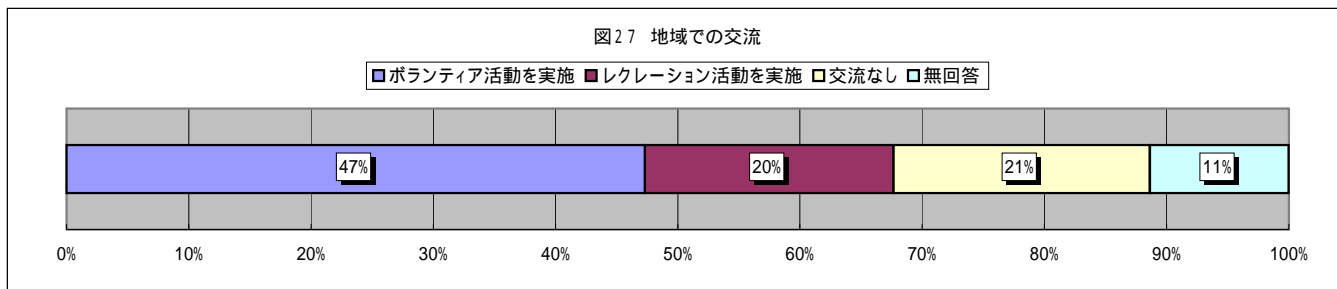


図27 地域での交流



(6) 指導者の現状

複数体制で指導に当たっているが88%と圧倒的に多く、1人で指導しているは5%だった。ちなみに昨年の登録団は338団で、登録指導者数は1,985人あり、1団平均5.9人指導者がいることになっている。指導者の性別は、男性86%に対して、女性は6%だった。

指導者の年齢構成は、40歳代が38%と最も多く、次いで50歳代の22%、30歳代の19%、20歳代の10%と続く。そして60歳以上の指導者も5%いた。

指導者の86%は団員に平等に接していると答えていたが、4%は主力に重点をおいて指導にあたっている。逆に下手な子を重点的に指導しているのは2%ほどしかなかった。

子どもを指導するにあたって、毎年県主催の研修会に参加して資質の向上を図っている人は14%、独自に研修している人は29%だった。認定員養成講習会を1回受けただけの人が36%で、研修もなにも受けたことのない人が13%もいた。

少年団活動に子どもたちの健全な育成を目指しているのが57%と最も高く、次いでスポーツの楽しさが23%、技術の向上が11%、勝ことを求めているのも2%あった。

図28 指導体制

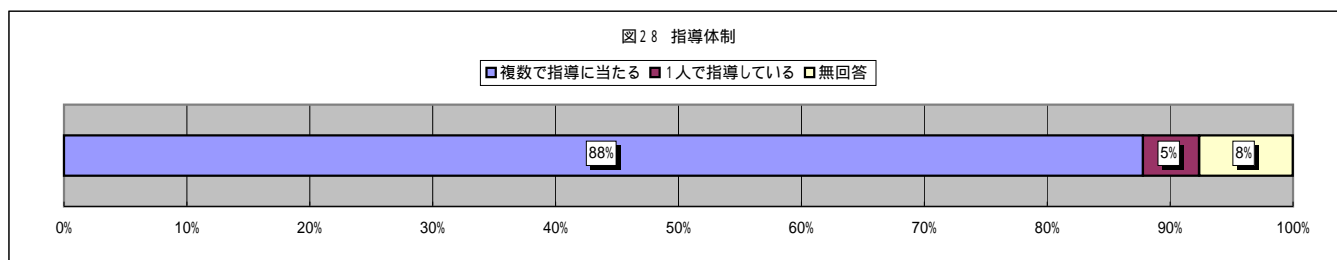


図29 指導者の性別

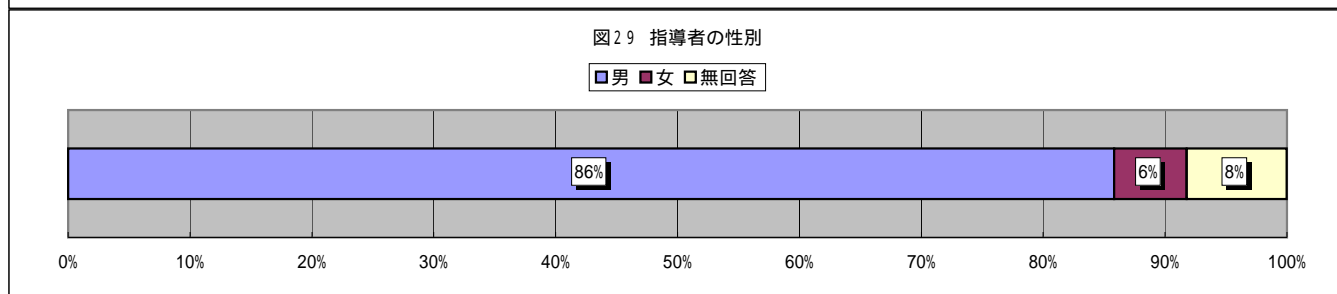


図30 指導者の年齢

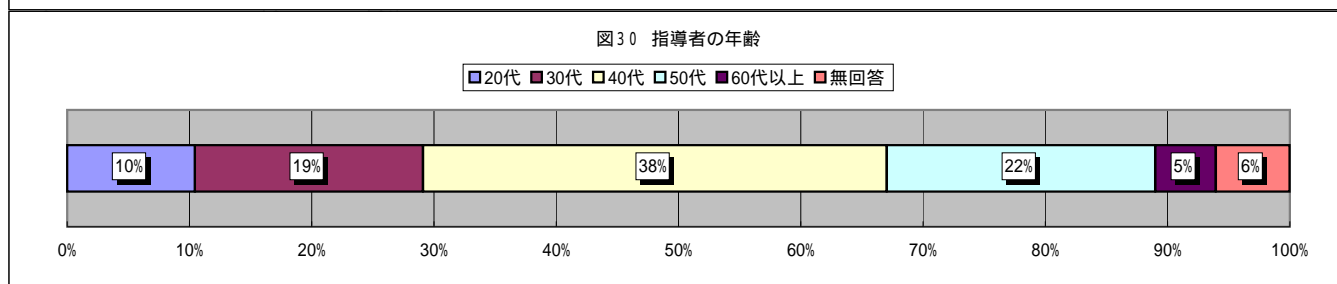


図31 子どもに対する接し方

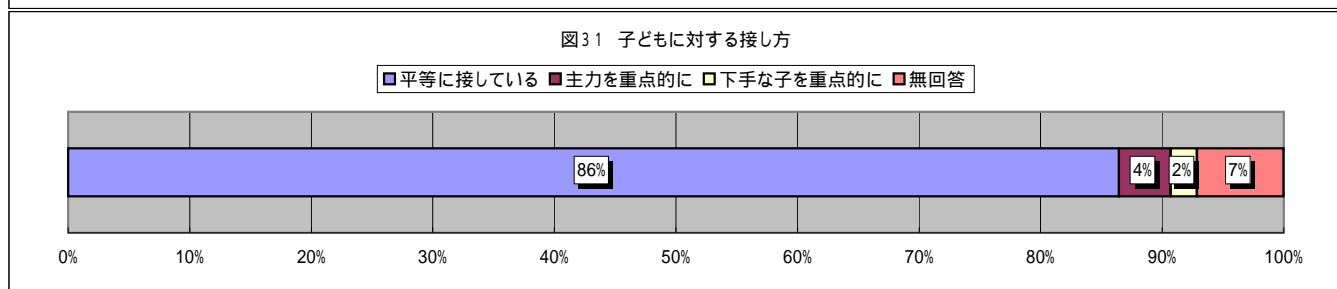


図32 資質の向上

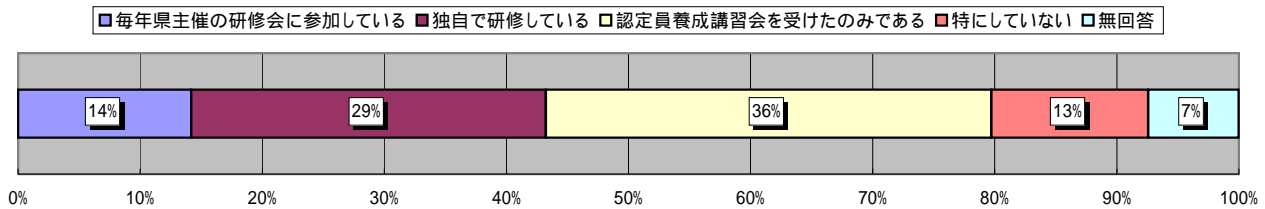
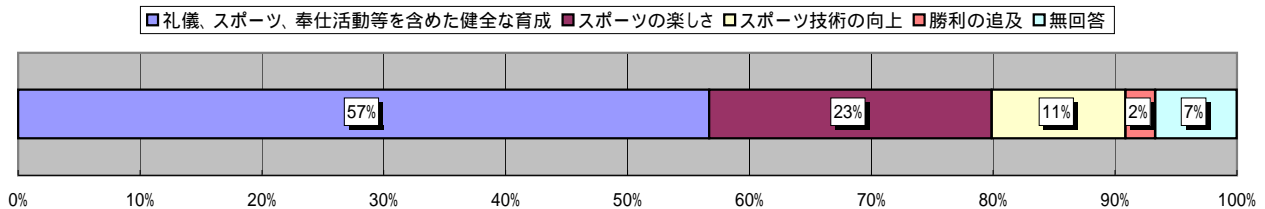


図33 活動に最も目指すもの



(7) 考察

今回、単位団の指導者に対してアンケート調査を実施し、45.3%の団から回答を得ましたので、設問ごとに考察してみました。

(1) 団活動の形態についてですが、本県では単一種目での活動が90%近くで、複合種目での活動は全国平均の13.8%に対して4ポイント少なかった。総合型スポーツクラブで活動していると団が1%あった。

本会では、市町村に少なくとも一つ総合型スポーツクラブを設立するよう育成・支援しているが、その中で、スポーツ少年団をベースにした総合型クラブの設立も働きかけているが、県内ではまだ5市町14クラブが設立されただけであり、少ないのは致し方ない。(図1)

(2) 大会・遠征等への参加状況を見ると、9回以内が54%、10以上が45%で半数近くが平均月1回は何かの大会に参加していることが分かった。中には、40回(卓球)36回(サッカー)参加したと回答した団があった。1ヶ月平均3回かそれ以上大会等に参加したことになる。

県内の大会にも泊を伴った場合があると回答した団も35%あったが、東西に長い本県の地理的な特性によるものと考えられる。(図3～10)

(3) 活動の実態については、平日は週2日で1日の平均活動時間2時間以内が最も多く、土・日では、両日とも1回2時間以上活動するとの回答が最も多かった。1週間のトータルでは、2日で、5～10時間が最も多かった。しかし、毎日活動すると回答した団が1%、休日は3時間以上活動する団も34%あった。1週間の延べ活動時間が16時間以上と回答した団が8%もあった。それが、どの程度の時間であるかということ、例えば今年の全国高校総体ホッケー競技で優勝した横田高校が週6回延べ15時間練習しているが、それ以上に活動している団があることが分かった。

いつまで団活動をしているかについては、70%以上の団が小学生までで卒団させているが、何とか中高と継続して活動するように、特に中学3年生の夏以降から高校へ進学するまでの間活動ができるよう団をあげて働きかけをしてほしい。

何年生から参加させているかについては、1年生からが58%と半数以上を占め、低学年からの参加が増えている。本県では小学校在学数がここ5年で平均して860人ずつ減少しており、やはり少子化のため、そうしないと団活動が成り立たなくなってきたように思われる。(図11～21)

(4) 学校とのかわりについてでは、73%の団が学校施設で活動しつつも、教職員の関わりは13%しかないこと、また学校と連携を取っている団や学校から何も言われたことがない団が半数程度あることから見て学校との関係が希薄になっているようだ。また、子どもが疲れすぎていると言われた12%の団は、学校での子どもの生活態度や実態をよく聞き、活動内容等をよく検討して、両者が良好な関係を築けるようにしていかなければいけない。(図11、22～24)

(5) 団活動への保護者の関わりについて、練習・大会等全ての送迎・応援に64%の保護者が関わり、又、年間の活動費の支出については、8～10万円以上が14%もあり、積極的なサポートと大きな経済的負担の上に成り立っていることが伺われる。(図25・26)

また、ボランティア活動などを通して地域と交流を図っている団が67%ある一方、競技活動のみを行っている団も5団に1団あり、指導者には団員が地域に貢献する活動や、地域と交流を図る活動を取り入れるよう望みたい。(図27)

(6) 終わりに、指導者がスポーツ少年団活動に目指すものとして、「礼儀、スポーツ、奉仕活動等を含めた健全育成」や「スポーツの楽しさ」を答えている指導者が80%いる一方、「スポーツ技術の向上」に11%、さらに、「勝利の追及」も2%の指導者が目指している。(図33)

スポ少の指導者は、ボランティアで行っている人が殆んどであり、その熱意と努力は高く評価されるが、ハードな練習を行い、大会に多く参加し、勝つことのみを求められ、少年団でバーンアウト(燃え尽きる)するため、進学しても競技をやめたり、楽な部活に入る子どももいると言われている。

少子化で、しかも競技力が低迷している本県にあって、スポ少で活動する子どもは「宝物」であることを指導者、家庭、競技団体、学校体育団体等が自覚し、スポーツをすることが楽しい、中高へ進学してもずっと続けたいと思われるような少年団活動となるよう、「少年スポーツ活動の指針」について検討していく必要があるのではないだろうか。

